

平成 22 年 6 月 24 日現在

研究種目：基盤研究（A）
研究期間：2006～2009
課題番号：18203039
研究課題名（和文）博物館教育・普及事業の事例分析と日本の伝統文化に関する
先駆的教育・普及理論の構築
研究課題名（英文）Study of Museum Education Programs through Case Analysis and
Development of Museum Education Theories Focused on Japanese Traditional Culture
研究代表者
井上 洋一（INOUE YOICHI）
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部企画課・課長
研究者番号：60176451

研究成果の概要（和文）：アンケート調査に基づき抽出した国内外の主な博物館・美術館等における教育・普及事業の現地調査を通し、博物館教育・普及事業の現状と課題を明確化させた。また、国内外の博物館関係者らとの連携により、国の違いによる伝統と文化の多様性の意義を確認するとともに、そこから日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論のあるべき姿を提示した。さらに、新たな古美術鑑賞法や実践的な博物館教育・普及プログラムを制作・実施した。

研究成果の概要（英文）：In this research project, we clarified current situations and issues concerning museum education programs through on-site research of museum programs selected from questionnaire results from museums in Japan and other parts of the world. Cooperative works with staff members of domestic and foreign museums proved the significance of the diversity of traditions and cultures among various countries, which became a suggestion towards innovative theories concerning the education for the appreciation of Japanese traditional culture. Furthermore, practical methods and experimental education programs were also composed and implemented, focusing on the viewing and understanding of traditional Japanese art.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2006 年度	10,800,000	3,240,000	14,040,000
2007 年度	7,500,000	2,250,000	9,750,000
2008 年度	7,800,000	2,340,000	10,140,000
2009 年度	9,300,000	2,790,000	12,090,000
年度			
総計	35,400,000	10,620,000	46,020,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：①先駆的博物館教育理論 ②博物館教育・普及活動 ③古美術 ④伝統文化

1. 研究開始当初の背景

東京国立博物館は日本屈指の日本古美術の宝庫である。しかし、古美術は一般的に難しい、あるいは、わかりづらいものとして特に若年層を中心に敬遠される傾向にあった。一方、新学習指導要領にも「伝統と文化」が盛り込まれる状況にあり、その理解と次世代への継承が如何に大切であるかということが社会的認知を受け始めていた。こうした学校教育の動きと連動し、私共は、以前より進めてきた伝統文化の理解促進につながる活動を新たな博物館教育理論をもって推し進めることがきわめて重要であると考えた。優れた文化財のもつ魅力やその歴史的・文化的背景をわかりやすく来館者に伝えるとともに、来館者が実際に求める博物館教育・普及プログラムとは何かを真に希求すべきとの発想から本研究が計画された。

2. 研究の目的

(1) 国内外の博物館・美術館で行われている先駆的博物館教育・普及(広報活動を含む)事業事例を網羅的に収集し、その事業内容を分類し、分析を行う。

(2) その結果に基づき、わが国特有の古美術・伝統文化への理解を深めるための独創的かつ先駆的な博物館教育理論を構築する。

(3) 博物館が来館者および広く一般の人々に何を発信していくべきなのか、という社会的な課題に対し、博物館が発行する普及(広報)印刷物やワークショップ等さまざまなツールの組み合わせの分析を通し、実践的な博物館教育・普及活動のあり方を提示する。

3. 研究の方法

(1) 本研究に関する国内外の文献資料の収集。

(2) 国内外の博物館・美術館に対し、教育・普及事業に関するアンケート調査を実施。

(3) 回収したアンケートを分析し、参考とすべき先進的な教育・普及プログラムを実施している国内外の博物館・美術館について、現地にて、その実態調査を行う。

- ①プログラムの見学および参加
- ②写真・ビデオ等による各種プログラムの記録
- ③スタッフへのインタビュー
- ④普及(広報)印刷物の収集
- ⑤得られたデータのデジタル化

(4) 収集データの整理と分析

(5) 博物館教育理論の構築

- ①研究会の開催
- ②国際シンポジウムの開催
- ③東京国立博物館の来館者を対象に、日本の古美術や伝統文化の理解につながる教育プログラムの開発と実践

4. 研究成果

(1) 各方面からの情報をもとに、国内1,140館、国外607館の博物館・美術館に対して教育・普及事業に関するアンケート調査(①各館の使命・設立趣意、②組織、③教育・普及

(広報)事業の種類と館の事業計画における比重、④教育・普及(広報)事業の総予算内に占める割合、⑤実践プログラムの内容・対象・方法、⑥来館者層などを調査)を実施し、それに基づき、参考とすべき教育・普及プログラムを実施している博物館・美術館について地域別に現地調査を行ってきた。この現地調査により各館が行う教育・普及プログラムの理念とその実施方法等、本研究に必要な多くの新知見を得ることができた。中でも、館として大まかな教育活動の役割やめざす考え方はあるが、何かひとつの理論に拠ってすべてが決定されるわけではないとする意見や対象者層に合わせて個別の適切な理論を援用しているといった意見が多かったのが印象的であった。また、各館における教育・普及部門のあり方自体をも把握することができ、きわめて有意義な調査となった。

(2) これまでの調査研究成果を踏まえ、実験的な博物館教育プログラム「応挙館で美術体験」、博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができること」を開催し、研究のまとめを行った。

①「応挙館で美術体験」プロジェクトは、現代美術を入り口とした新たな古美術鑑賞法の実験的試みである。現代作家による作品体験が来館者の古美術あるいは伝統文化の理解促進につながり、また新たな博物館教育理論を生むきっかけとなった。この成果を『「応挙館で美術体験」の記録』にまとめた。

②国際シンポジウムでは、各国、各地域の伝統と文化の多様性の意義を確認するとともに、日本の伝統文化に関する先駆的教育・普及理論の構築につながる討論を行った。また、本シンポジウムは、国内外の研究者のネットワーク構築にも大きく寄与した。その成果はインターネット上で東京国立博物館から発信できるよう準備を完了した。

(3) 本研究において、現代的な博物館教育事業のあり方について、多方面から有益な情報を得るとともに、その情報をもとに国際シンポジウム等での討議・分析を行い、その成果を東京国立博物館でのさまざまな教育普及事業に反映させた。

(4) 先駆的博物館教育理論の構築

①調査の結果、各館の博物館教育担当者は、構成主義的博物館教育理論やVTS(ヴィジュアル・シンキング・ストラテジー)理論、多重知性理論など欧米型の理論を参照していることが多かった。しかし、各館での教育・普及プログラムの企画・実施にあたっては特定の博物館教育理論を採用するのではなく、

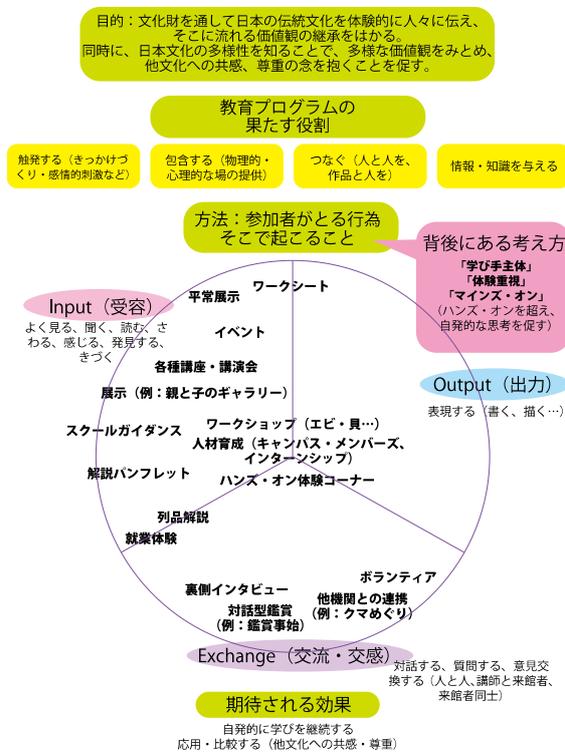
むしろ対象者層に合わせて、個別の適切な理論を組み合わせて援用していることがわかった。

②日本の伝統文化を扱う、博物館教育プログラムの「理論構築」とは、国内外の調査および実践経験から導き出された当館の教育プログラムの基礎となる理念を整理・言語化し、今後の実践の指標とすることである、と、我々は現在の目標を設定した。

③その過程として、我々はまず、当館の教育・普及活動の目的を明文化し、その後、その目的に沿って教育プログラムが果たすべき役割を定義し、その役割を果たすためのプログラムの手法の部分、つまり来館者がそこでどのような行為をし、何が起こるのか、を3つの領域に整理した(図1)。

(図1)

東京国立博物館における教育普及活動を支える理念を図式化したもの



④東京国立博物館における教育・普及活動の目的の設定(図1より):文化財を通して日本の伝統文化を体験的に人々に伝え、そこに流れる価値観の継承をはかる。同時に、日本文化の多様性を知ること、多様な価値観をみとめ、他文化への共感、尊重の念を抱くことを促す。

つまり、文化財を鑑賞することが、単に個々の文化財の知識・情報について理解することにとどまらず、背後に流れるその文化の伝統的価値観を理解すること、ひいてはそれが日本のみならず多様な文化の中でそれぞれ起こっていることだと実感し、その理解を尊重につなげること、そういったところまで

を目的とすることで、真に「日本の伝統文化」について博物館で扱う意味が出てくるのではないか。また、それらを、自発的な心の動きをとまなう体験として提供することも、学び手の真の理解につながることで、重要である。

⑤教育プログラムの果たす役割(図1より)の整理:上記の目的④をもって、当館の教育プログラムの果たす役割を、以下の4つに分類した。

1. 触発する(きっかけづくり・感情的刺激など)
2. 包含する(物理的、心理的な場の提供)
3. つなぐ(人と人を、作品と人を)
4. 情報・知識を与える

従来であれば、「4. 情報・知識を与える」というのが主流であったであろう博物館での学びにおいて、目に見えづらい形ではあるがプログラムがもたらす心理的効果や、自発的な心の動きを促すための細やかなきっかけづくり・場の提供といった部分にも目をむけ、それも同等の役割として、列挙した。

⑥方法(参加者がとる行為、そこで起こること)の分類:上記の目的と役割をもった教育活動を具体的に行うにあたり、それらの役割を果たすために我々がとる方法(プログラムの手法)について、現在行っている(科学研究費の一環として近年開発されたものも含め)さまざまなプログラムを整理してみた。整理をするにあたり、座学的な講座から、実技的なワークショップにいたるまでの多様なプログラムを分類するために、3つの領域が設定された。

1. Input (受容)
2. Output (出力)
3. Exchange (交流・交感)

インプット型とアウトプット型だけでは割り切れない、対話や意見交換をとまなう交流・交感型ともいえる第三の領域を設けることによって、上記の教育プログラムの目的・役割の中にある「自他の価値観を認め合う」という要素を包含した。

⑦上記④⑤を勘案して開発されたプログラムの実践例:

1. 「貝合せ」を作成するファミリー対象のプログラム
2. スライド(古墳時代の鞍)を使った作品鑑賞レクチャー

この二つの事例には、「学び手を主体」とし、「各自の体験を重視」し、「自発的な思考を促す」と同時に、それを「他者と共有する」といった要素が詰まっている。これらの実践事例が、我々が今回まとめた指標を象徴的にあらわしている。

⑧期待される効果とこれからの展開:学び手主体、自発的な思考を促す、体験的要素を重んじる、ひとつの見方を応用して他も見てみる

(比較する)、自他の視点を共有する、などを背景に行う教育プログラムがもたらす効果としては、今後も学び手が自発的に学びを継続させること、そして自らの文化への理解を応用・比較することが他文化への共感・尊重につながるということ、この2点があげられる。

先に挙げた二つの事例は、まさにそのきっかけとなるようなものである。あえていうならば、そこではジョン・デューイの体験を重視した学びの理念や、それがハンズ・オンという体験型の活動のみならず、心に響く経験となって学びにつながるマインズ・オンにまで昇華される過程、知識は自己の内部で自発的に構築されるとするジョージ・ハインの構成主義的博物館教育理論、そして人それぞれに適した多様な学びのスタイルに 대응するハワード・ガードナーの多重知性理論など、さまざまな教育理論が基盤となっている。これらの理念を対象層に合わせ、有機的に、柔軟に活用することで、上述した大きな「目的」を果たすことにつながる、それが言うならば我々の実践への指標であり、「理論」といえるのかもしれない。

(5) わが国特有の古美術や伝統文化の魅力、そしてそれらがもつ歴史的・文化的背景をわかりやすく次世代を担う若年層に伝えるためには、学校教育の動きと連動した伝統文化の理解促進につながる体験型の活動を新たな博物館教育理論をもって推し進めることがきわめて重要である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計9件)

① 加島 勝、表慶館「みどりのライオン みんなで楽しむ教育スペース」の開設について、MUSEUM、査読有、No. 611、2007、3-7

② 小林 牧、みどりのライオン 教育普及活動について、MUSEUM、査読有、No. 611、2007、9-26

③ 鈴木 みどり、デンバー美術館の教育普及事業—ミュージアム・エデュケーションからミュージアム・エクスペリエンスへ—、MUSEUM、査読有、No. 611、2007、27-46

④ 藤田 千織、博物館における鑑賞補助ツールの役割—「親と子のギャラリー」を例に、MUSEUM、査読有、No. 611、2007、47-73

⑤ 神辺 知加、「子供のための文化史展」について—東京国立博物館の教育普及事業

史研究 敗戦直後—、MUSEUM、査読有、No. 611、2007、75-91

[学会発表] (計9件)

① 藤田 千織、博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができること」概要報告、全国美術館会議・教育普及研究部会、2010年3月23日、東京国立近代美術館

② 鈴木 みどり、東京国立博物館の教育普及—伝統文化を伝えるために、博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができること」、2010年1月24日、東京国立博物館

③ 加島勝、白井克也、鬼頭智美、遠藤楽子、鑑賞プログラム「応挙館で美術体験」について、博物館教育国際シンポジウムポスターセッション「伝統文化を伝えるために博物館ができること」、2010年1月24日、東京国立博物館

④ 小林牧、鈴木みどり、「伝統文化を伝えるために博物館ができること」パネルディスカッション、博物館教育国際シンポジウム「伝統文化を伝えるために博物館ができること」、2010年1月24日、東京国立博物館

⑤ 鈴木 みどり、誰のためのミュージアムリテラシー？、ミュージアムマネジメント学会第一回基礎研究部門、2009年7月4日、東京国立近代美術館

⑥ 鈴木 みどり、ワークショップ：ミュージアム・プログラム『和とじてつくる海の博物館図譜づくり！』、九州大学ユーザーサイエンス機構巡回展「クジラとぼくらの物語」、2008年9月27日、西新プラリバ

⑦ 鈴木 みどり、デンバー美術館などに見る教育普及事業の新たな動き、地域創造「アートミュージアムラボ青森セッション」、2008年7月17日、青森県立美術館

⑧ 鈴木 みどり、Educational Activities in the Tokyo National Museum - three approaches -, Victoria and Albert Museum 研究会、2008年3月19日、Victoria and Albert Museum (英国)

⑨ 鈴木 みどり、Educational Activities in the Tokyo National Museum - three approaches -, Glasgow Museums 研究会、2008年3月16日、Glasgow Museums (英国)

〔図書〕(計1件)

① 井上洋一, 加島勝, 鬼頭智美, 白井克也, 遠藤楽子, 鯨津朝子, 松嶋雅人, 木下史青、東京国立博物館、「応挙館で美術体験」の記録、2010、116

6. 研究組織

(1) 研究代表者

井上 洋一 (INOUE YOICHI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・企画課・課長
研究者番号：60176451

(2) 研究分担者

加島 勝 (KASHIMA MASARU)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・博物館教育課・課長
研究者番号：80214295

小林 牧 (KOBAYASHI MAKI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・広報室・室長
研究者番号：50332135

鈴木 みどり (SUZUKI MIDORI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・教育普及室・主任研究員
研究者番号：70321552

白井 克也 (SHIRAI KATSUYA)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・平常展調整室・室長
研究者番号：70300689

神辺 知加 (KAMBE CHIKA)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・教育講座室・研究員
研究者番号：40332134

鷺塚 麻季 (WASHIZUKA MAKI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・教育講座室・室長
研究者番号：50356268

藤田 千織 (FUJITA CHIORI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・ボランティア室・研究員
研究者番号：70419886

鬼頭 智美 (KITO SATOMI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・国際交流室・室長
研究者番号：80321553

遠藤 楽子 (ENDO MOTOKO)

独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・国際交流室・研究員
研究者番号：60415619

田沢 裕賀 (TAZAWA HIROYOSHI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸研究部・絵画・彫刻室・室長
研究者番号：80216952

高梨 真行 (TAKANASHI MASAYUKI)
独立行政法人国立文化財機構東京国立博物館・学芸企画部・ボランティア室・研究員
研究者番号：60356269